

[翻 訳]

イラズマス・ダーウィン著

「植 物 の 愛」 (1)

出版 1806年

翻訳 加藤芳子

木の葉は生きる、美しく。豊かな木は愛する、森のすべてを
高みから。シュロの木はゆれる、互いに束^{たば}になり。
ポプラは呼吸する、特有の音をたて。
プラタナスはプラタナスに、ハンノキはハンノキに
ささやきかける。

クラウディアース [古代ローマ詩人] 作

「祝婚歌」* より

序

親愛なる読者よ

見よ、ここに一台のカメラ・オブスクーラ** [暗箱] が、あなたの視界に披露^{ひろう}されています。その中では光と影が、白く塗ったキャンパスの上で踊っており、目に見える実物大の大きさに拡大されています！——もしあなたが、このような詰まらない娯楽を楽しむ暇^{ひま}を沢山お持ちでしたら、中に入って、私の「魔法の植物園」^{きょうい}の驚異を、ご覧になってみて下さい。

かの有名な、ローマの皇帝アウグストゥスの宮廷において、偉大な魔術師と呼ばれた、プブリウス・オウィディウス・ナソー [43 BC-AD 17?] は、[その著^{てんしん}『転身物語』の中で] 人間や神々や女神たちまでをも、木や花に変身させました。それに反して私は、オウィディウスと同じ方法によりながらも、逆に、それらの一部を、長い間それぞれの植物の邸宅^{とりこ}に、虜としてとどませた後で、それらの元の動物の生態^{せいたい}に、戻すことを企てました。そして、それらをこのように、あなたの目の前にお見せしたのです。これはあなたにはまるで、貴婦人の化粧室の暖炉の上に掛かっている、たった一本の細いリボンの花綱^{はなづな}でつながっているだけの、小さな肖像画のように [つまらなく] 思えるかもしれませんが。しかしそれらの絵は、あなたがその本人をよくご存じないとしても、その人物達の美しさや、優雅^{ゆうが}な物腰^{ものごし}や、衣服^かの華麗^{かれい}さによって、あなたの心を楽しませてくれる事も、あるかも知れないのです。

さようなら。

植 物 の 愛

第 1 編

空に舞う空気の精たちよ！ 空気の聖歌隊よ、おりてきて
小さな手で、その銀のライア [たて琴] をかき鳴らしなさい。
妖精^{ようせい}の足跡^{あしあと}で、草に輪の跡をつけなさい。

地の精達よ！ チリンという、弦の音に合わせなさい。

その間私はオート麦の笛の音に合わせ、優しい調べで
草原の楽しい希望や、恋の悲しみを歌う。—

5

濃い色の枝を風にそよがす、巨大なカシワの木々から
その樹皮^{じゅひ}にへばりつく、小植物のコケに至るまで
どんな色男や美人たちが、華麗^{かれい}な森という森に集まり
植物の愛¹を求愛し、獲得^{かくとく}していることか。

10

いかに冷たいユキノハナや、青い眼のイトシャジンが
小川に身をせり出して、優しい愛^{しずく}の雫を混ぜ合わせているか。
恋に悩むスマレや、淡黄色のサクラソウが
可愛い頭を下げ、そよ風にささやきかけているか。

ひそかにため息をつき、処女のユリは頭をたれ、
嫉妬^{しつと}深いキバナノクリンザクラは、黄褐色の花のがくを
垂^たれているか。

15

ダマスク・ローズの淡い、ピンク色も盛りの若いバラが
いかに恥^{はじ}らう花嫁の、暖かい^{ほほ}頬の紅色を吸っているか。
心奪われたスイカズラが、蜜^{みつ}の唇を合わせ
優しい腕^{から}で絡^かみつき、甘いキスを交^かわしているかを。—

20

優しい小川よ、そっとささやく水の流れを止めなさい。

ささやく風よ、静かに、さらさら言う木の葉よ、静かに。

銀色のチョウよ、ふるえる翼^{つばさ}を休めなさい。

カブトムシよ、ぐるぐる飛んでいる空から、おりてきなさい。

色鮮^{あざ}やかなガよ、金色の羽をたたみなさい。

25

幅広い触覚^{しょっかく}を弓のように曲げ、らせん状の胴を伸ばしなさい。

ホタルよ、コケむした川底で光りなさい。

クモよ、長く伸ばした糸に、おりてきなさい。

ニス^ぬを塗った穀^{から}を持つ、角^{つの}のあるカタツムリよ、ここまで
這^はってきなさい。

ミツバチの幼虫よ、蜜蠟^{ろう}の巣穴の中で聞きなさい！

30

植物のミューズ神よ！ あなたはこの近世の時代に
かのスウェーデンの賢人^{けんじん}リンネを、その軽やかな手でいざない
その鋭い眼に対して、あなたの秘密^{せいそくち}の生息地を
露の谷間、高木の森、入り組んだ海岸に、探検するよう命じた。
いかに小さな美の三女神が、一枚一枚の木の葉に住んでいるかを
花の冠^{かんむり}の中で、いかに喜びが笑っているかを
いかに昆虫の愛が、クモの巣のように薄い翼をつけて飛び
軽い矢^{ねら}で狙いをつけ、小さな針を向けるかを、語らせた。

35

「まず背の高いダンドク [カンナ属]²は、弓なりの眉^{まゆ}を
天に垂直^{すいちよく}にあげ

彼の結婚^{せいやく}の誓約を、誓う。

40

この貞淑^{ていしゆく}な夫婦は、英国より温暖^{おんだん}な国に生まれたので

秋の凍^いてつく朝の、荒々しい突風を怖がっている。

凍^{こご}えている美人の周りに、彼は深紅^{しんく}のコートを巻き

臆病^{おくびょう}な美人を、胸に抱きしめている。

「植物の愛」(1) (加藤芳子)

アワゴケ³よ、あなたの愛は、その星形の眼と
45
明るい色の髪に魅^みせられた、二人の処女が共有し—
緑の葉のふちにこの青年はすわり、波間に^{なみま}
そのふわりと流れる、髪を洗い
流れる小川に、その美しい姿が映るのを眺め^{うっ}
鏡^{かがみ}のような水面の上に、身を乗り出している。 50

テーブルヤシ⁴という優しい名を持つ、二人兄弟の
色男達は、姿も形も同じで
美しいテーブルヤシをめぐり、恋敵^{こいがたき}と共に溜め息をつき
濃い眉をひそめ、眼をぎよろつかせている。
哀れに思った美人は、優しく心配して嘆き^{なげ} 55
嫉妬^{しつと}深い二人を微笑で、代わる代わる慰^{なぐさ}めている。

テンニンカの木陰では、ヒトツバエニシダ⁵が
美しく咲いている。
そしてこの気高い乙女に対しては、十人もの優しい兄弟が
求愛^{きゅうあい}している。
敬愛^{けいあい}されているセイヨウヤマハッカ⁶よ! あなたの
香り高い祭壇^{さいだん}の前には
二人の騎士^{きし}が、身をかがめ
二人の従士^{じゅうし}が、かしずいている。— 60
カタクリモドキ⁷の柔らかな飾り鎖には、五人の懇願^{こんがん}する
伊達男^{だて}が愛を告白し
笑う美人を相手に、一致協力して求愛している。
皆のように、彼女はふざけてお辞儀^{じぎ}をし
黒い眼をきよろつかせ、金髪をなびかせている。

長々と慎重な求愛を受けても、つれなく内気なウコン⁸は
優しい夫に会うにも、目をそむけている。 65

四人のヒゲも生えていない若者が、プラトニックな
優しい愛の言葉で、このかたくなな美人の心を動かしている。

憂いに満ちたタチアオイ⁹は、空しい欲望に燃え
悲しいエロイーズ [アベラールの恋人] のように、
恋に焦がれ、嘆いている。 70

ソバカスだらけのアヤメ¹⁰は、もっと激しい恋の炎に燃え
三人の嫉妬を知らない夫が、この乙女と結婚している。
緑濃きイトスギ¹¹の花は、その暗い花嫁を軽蔑し
一つの丸天井が二人を包んでも、二人のベッドは離れている。

誇り高いビヤクダン¹²は、怒れる美人から逃げるように離れ
二軒の家で初めて、上流社会風のカップルをなしている。 75

オオバコ¹³は醜い奇形と、つがいとなっている。
奇形の植物の誕生よ！ そして百もの頭をもたげている。
だが彼は優しい愛の言葉で、優しい美人の心を魅了し
その百もの腕の中に、この美人を抱きしめている。 80

美しくうら若き、かくも不運なデズデモナーは
オセローの魅惑の言葉に、そそのかされて
不思議で哀れな物語を聞いては、ため息をつき、困惑し
うっとりして、彼の黒い胸に身を沈めた。

ハルガヤ¹⁴よ！ 君の場合は、二人の優しい羊飼いと
その妹で妻の女達が、神のような人生を送っている。 85
ヒースの花が、華麗な紫色に染まって、一面に広がり
ハリエニシダが、あちこちに金色の光を
緑のくぼみの中に混ぜている所では、ねたまれることの

「植物の愛」(1) (加藤芳子)

ない群れよ！

青い煙が、彼らの芝で作った小屋から立ち上っている。

90

芳香に包まれ、ヒースの子供達は頬を赤く染め

暖かい太陽を見上げ、銀の雨を飲んでいる。

美しいゼンマイ¹⁵は、静かな谷や

ツタの天蓋^{てんがい}や、露のしたたる庵^{いおり} [花粉のう] をさがす。

木陰に隠れて、秘密^{ひみつ}の儀式を行ない

95

やがて緑の子供達が、母親の恋人の数を明らかにしてしまう。

美しいキクジシャ¹⁶ [チコリ] は、独裁^{どくさいてき}的な魅力によって

五人の兄弟である愛人達の、穏^{おだ}やかな心^{くんりん}に君臨している。

この不安定なニンフがため息をつけば、彼らも同様に悲しむ。

そして彼女が微笑めば、恋敵ながらも、歓喜に燃える。

100

まるで同音^{かな}を奏^{かな}でるエオリアン・ハープが

あなたの類似^{るいじ}した金属弦を、美しい協和音で奏でるように。

今、春のそよ風の翼に、そっと吹かれ

恋煩^{わづら}いの弦楽器は、静かなリズムになる。

そして和音を混ぜ、さっきよりも高音の声で

105

天上の聖歌隊の歌が、最高潮にとどろく。

美しいセンノウ¹⁷よ！ 五人姉妹のニンフ達は、

あなたと一緒に

月の女神ダイアナのお供^{とも}に加わると誓う ― が、空しい。

処女の一群は、一つ屋根の下に住んではいるが

優しい恋人から逃げ、彼の差し出す手をはねつけている。

110

しかし静かな時が、そよ風の翼に乗って動き

微笑^{ほほえ}む五月がリュートを、愛^{ちようりつ}に調律すると

気まぐれな美人は、みんな目一杯に着飾って
 明るい露のしずくを、紅潮した顔から振り落とす。
 派手な普段着を着て、恋敵に魅力を誇示し
 驚いている恋人達を、彼女の腕に招いている。 115

若い「時」が、彼女のもつれた髪の中に
 バラのつぼみと、美しいユリを編みこむと
 誇り高いキツネユリ¹⁸は、三人の選んだ恋人に
 彼女の処女という鎖^{くさり}の、赤面のとりこの生活をさせた。— 120
 —「時」の粗野^{そや}な手が、彼女の弱々しい腕の周りに
 しわだらけの皮膚^{ひふ}を広げ、頭に白髪^{しらが}を増やすと
 もう三人の若者が、彼女の晩年の年月を
 彼女のずる賢い老年^{がしこ}の、おだてられた生け贄^{い にえ}として占める。

それで美貌^{びぼう}が衰えると、ニノン [18C 仏の美女の名] は 125
 宿命的な笑みを浮かべ、うっかりと放蕩^{ほうとう}な息子を得た。—
 子供の腕に抱きしめられ、彼女は母という名を手に入れた。—
 「せっかちな若者ね！ 思いとどまり、よこしまな炎を

抑えなさい。

まずあのベッドで、あなたの子供としての鑄型^{いがた}はプレスされ
 私の陣痛^{じんつう}によって生まれ、私の胸で育てられたのよ。」 130
 死の淵^{ふち}から急に戻ったかのように、彼はひどく驚き
 この美人を、燃えるような目で、熱烈にじっと見つめた。
 片ひざをつき彼は、狂気じみた腕を伸ばし
 ベッドの方を、やましい目付きで、盗み見た。
 次に、震える唇から、誓いの言葉をささやくと 135
 その青白い悔恨^{かいこん ひたい}の額を、天に向けた。

「だから、ねえ！」彼は叫ぶと、猛り狂った矢^{たけ}を突っ込んだ。

「植物の愛」(1) (加藤芳子)

すると命と愛が混じりあい、彼の心から噴出した。

残忍なハエジゴク¹⁹と、その美しい姉妹たちは
破壊にたけ、粘性のワナを広げている。

140

この売春婦の一団を、十人の背の高い暴漢たちが守り
顔をしかめて、見えない魔法の網を守っている。

空の住人である輝く [星の] 国々よ、急ぎなさい。

おお、ここから遠くへ、あなたの見えない航路の
舵を取りなさい。

優しい言葉や、可愛い紅潮、うなずき、微笑で

145

三人の恐ろしいセイレイネス [海の精] が、彼らとの
闘争に誘ったら

その手管のワナにかかったあなたは、針を向けても、むだ。

翼をブーンとばたつかせても、むだ！— だから

あなたの金色の仲間と、子供のミツバチを捜しに行きなさい。

あなたの命と引き換えに得る蜜など、味わってはいけない！

150

天の高い丸天井が、凝縮された雲を変形すると

美しいツバメズイセン²⁰は、もたれかかってくる嵐から逃げ

ぐらぐらした足取りで、隠れ家の谷を探し

紅潮した美貌を、嵐からそむけている。—

六人の恋敵の若者は、優しく心配し

155

彼女の怖れをしずめ、安心するようと、心配に魔法をかける。—

夕べに、陽に輝く神殿は、

その輝く十字架をかかげ、金色の風見を振り回す。

ピカピカの心棒は、そよ風が吹くたび回り

踊るすい星は、空高く燃えている。

160

セイヨウヒイラギ²¹には、四人の巨人族がひかえており
各人がその手に、千本の矢を握っている。

全ての鎧よろいの小札こぎねにある、千本もの鋼鉄こうてつの先端は
彼の剛毛質ごうもうのよろいの、輝く恐怖きょうふの種たねとなっている。――
このように重裝備じゅうそうびした不滅ふめつのムーア人は、魔法とを解き
泉りゅうのずる賢い竜を、殺した。――

165

突然、彼らの傷ついた胸は、怒りに燃え
攻撃をし返したり、傷をつけ返したりする。

硬い作物や、さざ波も立たない海原を
なでるそよ風のようにそっと、悪びれず

170

彼らはニードウッド [の森] の、広大な領地の国王と
その姉妹である妻たちと、美しい子孫たちを守っている。
人跡未踏じんせきみとうの森の空き地で、孤独こどくな巡礼じゅんれいを導き
こんもり茂った荒れ野で、さ迷う乙女を案内している。

このように [ダービー州の画家] ライトの大胆な画筆は、

ヴェスーヴィオ火山の頂上から

175

その真っ赤な溶岩²²を、あの問題の夜に向かって投げつける。
あの耐えられないほどの閃光せんこうを、カルペ [ジブラルタルの岩]
から始める。

空を炎と燃やし、炎上えんじょうする大洋を打ち砕く。――

あるいはその暗い部分に、後退して静かに落ち着くよう命じる。

静かな谷は曲がりくねり、柔らかな草原けいしやは傾斜している。

180

消えそうなそよ風は、青白い小川の上で弱まり

月の光は、その白はじい端で眠っている。

巨大なニンフよ！ 美しいフウセンアカメガシワ²³は

コクサギの平原の、優雅ゆうがさと恐怖きょうふとを支配している！

美人の紅潮が、彼女の暖かい頬の上にただよい

185

ヘラクレスのような神経が、彼女の筋すじばった手足を結びつけている。

「植物の愛」(1) (加藤芳子)

陽気な目つきで彼女は、びっくりした群集を見ると

そびえ立っている間、草原を揺さぶり

ふざけ半分に乱暴に、その魅力を誇示し

震える恋人達を、その腕の中に乗せる。

190

かくも美しいタレストリスは、彼女の羽で飾ったかぶとを振り

その突き出た胸を、硬い鎧に包み

その長い槍を、兵士の列めがけて構えると

戦争の女神ベローナの戦車からは、美がとどろいた。

ギリシアは武装しても空しく、彼女の捕虜となった英雄達は

愛の花輪で、征服の鎖を編んだ。

195

耕された芝土や、荒涼とした荒地の上に

引退する秋は、彼女のピューピュー鳴る突風を投げつけ

もがいている森を、騒々しい波のように曲げ

木の葉という名誉のしるしを、その海の上に惜しげもなく降らすと

花でおおわれていた土は、たまって、枯れ草の山となり

冷たくなった昆虫はみな、土の下にもぐる。

美しいチューリップ²⁴は素早く、声高に警報を飛ばし

その子供を前よりも強く、腕に抱きしめる。

安全な大型テントとなる、どこか人里離れた洞窟の中には

今までになく澄み渡った、空の求愛が待っている。――

それで六つの冷たい月は、ヤマネに魔法をかけて休ませ

気ままな眠りは！ ケワタガモの胸の下でまどろみ

空想の野で、核のある森にのぼり

彼の恋人と、黄金色の収穫を分かちあう。――

やがて荒れた空の下で、大地から明るく

美しいイヌサフラン²⁵が、輝く眼をして昇り

灰色の年の、冷たい胸を暖め

200

205

美のまばゆい光で、ほの暗い空を明るくする。

三人の紅潮した乙女が、この^{ごうたん}豪胆なニンフにかしずき 215

六人の陽気な若者が、心を奪われたお供^{とも}となり！ 守っている。

ジョージ王朝の星 [天王星] は、銀の^{ぼうごぶつ}防護物で輝き

彼のきらめく戦車は、夜の青いアーチの空^かを駆け

その輝く姿は、大波のような雲の上にかかり

霧をかき分けて進み、嵐の中で踊っている。 220

巨大なヒマワリ²⁶ は、たそがれの野で

陽気^{そうごん}で^{たくはつ}荘厳に、彼の托鉢の一団を導く。

五人ずつ整列して、華麗な隊列は進み

一列ずつ、羽毛飾りをつけた女性を連れている²⁷。

熱狂的な足取りで、彼は高台の荒地をのぼり 225

昇りくる夜明けに、敬意を表しておじぎして

ワシのように鋭い目付きで、黄金色の光線を飲み

太陽が動くにつれて、日の光^{きどう}の軌道をじっと見ている。

注

* 巻頭のクラウディア・アヌスのラテン語の詩の翻訳は、札幌大学女子短期大学部教授 高岡 尚氏に、ラテン語のチェックをして頂いている。ここに深く、御礼を申し上げます。なお、このラテン語の詩の翻訳は、荒俣 宏氏の訳本には省略されている。

** 「カメラ・オブスクーラ [暗箱]」については、日本 18 世紀学会第 27 回大会 (2005 年 6 月、於 日本大学) にて、「ベルナルド・ベロットの景観画再考 — 点景人物の問題を中心に」を発表された、東京大学大学院人文社会系研究科美術史学専攻博士課程の金沢 文緒さんに、ご教示いただいた。また、下記の参考書目にある、近藤 裕子教授にもご紹介いただき、その論文を拝読できることにもなった。ここに深く、お礼申し上げます。

「植物の愛」(1) (加藤芳子)

参考書目

テキストは、'The Loves of the Plants', *The Poetical Works of Erasmus Darwin, M. D. F. R. S., containing The Botanic Garden, in Two Parts; and The Temple of Nature.* London: J. Johnson, 1806.

翻訳は、荒俣 宏 編・訳、『英国ロマン派幻想集』、東京：国書刊行会、1984年を参考にしたが、原書の英語のテキストの誤植のせい、ところどころに誤訳があるので、注意を要する。

イラズマス・ダーウィンの略伝に関しては、拙論「シェリーとその周辺——Ⅲ」、『札幌大学総合論叢』、第20号、2005年、pp.43-50を参照のこと。

カメラ・オブスクーラについては、以下の文献を参照されたし。

近藤 裕子、「Camera Obscura をめぐると考察——ポウプとアルガロッチェー——」、東洋大学『経済論集』、27、2002年、163-169頁。

—、『華麗なる18世紀イタリア：「ヴェネツィア絵画展」』、(上野の森美術館、2002年)、pp.210-。

なお、原文中の膨大な量の、脚注および巻末の注は、後でまとめて出版する予定である。そのために、原文にはないが、注には、通し番号をつけてある。